

# 古代ギリシアのアスクレピオス崇拝と巡礼

山 川 廣 司

はじめに

- 1 アスクレピオスについて
- 2 エピダウロスの遺跡
- 3 古代ギリシア人の心性 一病の治療と信仰一

## はじめに

ギリシア神話の英雄で、医術の神とされるアスクレピオス (Asklepios) は、古典期にはペロポネソス半島東岸アルゴリス地方の都市エピダウロス (Epidauros) を中心に盛大に崇拝が行われ、特にヘレニズム期以降を頂点に、ローマ期まで続いた。

本報告では、古代ギリシアにおける巡礼の問題への手がかりを得るために、アスクレピオス崇拝について考察することで、古代ギリシア人の心性の一側面についてアプローチしたい。

## 1 アスクレピオスについて

アスクレピオスは、ホメーロスの『イーリアス』においては英雄として述べられ (II. IV, 405 etc.)、彼の2人の息子の医師マカオン (Machaon) とポダレイリオス (Podaleirios) はテッサリアのトリッカから30隻の船を率いてトロイア戦争に参加している (II. VII, 729-733)。その出生に関わっては、ヘシオドス (Hesiod. Fr.50, M-W) ではアポローンとメッセニア人のレウキッポスの娘アルシノエ (Arsinoe) の息子とされているが、ピンダロス (Pyth. 3) では、アポローンとテッサリアの王フェレギュアースの娘コロニス (Koronis) の息子となっており、メッセニアとテッサリアという2つの地域的解釈がみられる。

ピンダロスでは、コロニスはアポローンの愛人となったが、死すべき定め of イスキュス (Ischys) と結婚したことをカラスがアポローンに密告し、怒り狂ったアポローン (あるいは妹のアルテミス) が彼女を殺し、お腹にいた赤ん坊を茶毘用の薪の中から掘り上げ、ケンタウロス族のケイローン (Cheiron) に預けられたとされている。因みにアポローンは密告したカラスをそれまでの白から黒にしたという。その他にも異伝がある。エピダウロスでの伝承 (Paus. II 26) では、大盗賊だったフェレギュアースはペロポネソスに娘を伴ってやって来たが、アポローンに犯された娘のコロニスは密かに赤ん坊をエピダウロスで産み落とした。棄てられた赤児に牝山羊が乳を与え、犬が子守をした。動物たちの主人であるアレスタナースが赤児を発見した時、赤児は後光に取り囲まれていた。そこでエピダウロスでは犬の聖化と山羊の生贄禁止が行われたという。

アスクレピオスはアポロンによってケイローンに預けられ、彼から医術を授かるとされるが、やがて彼は名医となり、女神アテナから贈られたゴルゴーンの血によって死者を蘇らせる力を有するに及び天地の常道を覆すことを恐れたゼウスは、雷霆を投じて彼を殺し、星（蛇遣い座）とした。

エピダウロスでのアスクレピオス崇拝は青銅器時代に遡るとされているが、その発展は最初の聖域が建てられた後期アーケイック期に始まり、以後アスクレピオス崇拝発展の中心となった。紀元前5世紀にはシキュオン（Paus. II 10）、アテナイ（Paus. II 26）にも伝播し、アクロポリス西斜面の聖域にアスクレピエイオンが設けられた。紀元前4世紀にはアリスタイクモスの子アルキアス（Archias）はピンダソス山で狩りをしていた時に起こった捻挫をエピダウロスで治癒したので、この神をペルガモンに勧請し、その崇拝をもたらした（Paus. II 26）。紀元前293年に疫病治療のため、エピダウロスからローマに船で神の蛇を連れて行き、蛇はその本拠地としてティベル島を選んだという（Livy. 10.47.7）。このようにしてその崇拝はローマにも伝播した。その他コス（Kos）やクニドス（Knidos）両島にもアスクレピオス崇拝があり、「アスクレピオスの後裔」（Asklepiadai）と称する医師団があった。

## 2 エピダウロスの遺跡

エピダウロスの遺跡は主として紀元前4世紀の建築に属しているが、その時期からローマ帝国末期までそこでアスクレピオス崇拝が行われた。その聖域（temenos）は、アスクレピオス神殿やアルテミス神殿、イシス神殿などを含み、無数の奉納記念物やカタゴガイオン（宿泊施設）、アバトン、トロスなどの医療施設、公衆浴場、ストアなどの社会施設が広範囲に建立されていた。またアスクレピオスを讃えて4年ごとに開催されたスポーツと音楽の祭典はバラエストラ（体育場）、ギムナジウム（屋内競技場）、スタジアム、野外大劇場などで行われた。

遺跡はプロピュライア（入口）から聖なる道を進むと医療機関や神殿などの聖域の中心地にたどり着く。病人はまずアバトン（abaton）の列柱廊に案内された。そこで睡眠中アスクレピオス神が通常は蛇の形で突然患者の夢の中に出現し、治療の指示を与えた。すなわちそこはアスクレピオスの診断を待つ患者が眠る場所であった。翌日医師はその夢を聞いてカルテを作り、それに基づいて治療に当たった。現存する多くの碑文は、処方箋や奇跡、治療の例を示している。

トロスは紀元前4世紀の建てられた円形の壮大な建造物で、その使用は未だによくわからないが、外側はドーリア様式の列柱、内側はコリント様式の列柱で囲まれ、天井の格間は精巧に彫られたバラや百合で飾られていた。地下は迷路のようになっており、アスクレピオスから想定される聖なる蛇の巣として利用され、一説では患者のショック療法に用いられたとされる。ここでは精神神経症の治療にショック療法や精神病治療が施され、それは後にキリスト教に採用され、さらにいわゆる今日の心理療法に発展したと言われている。

エピダウロスのスタジアムはオリンピア同様、長さ600オリンピックフィート（191m）に匹敵する181mの直線コースで、周囲は馬蹄形のスロープで囲まれていた。さらに現在でも多くの人々が訪れ、絶賛されている約14,000人収容の野外大劇場は円形のオルケストラや55列の座席など典型的なギリシア建築をほぼ完全な形で現存している。

## 3 古代ギリシア人の心性

アスクレピオス崇拝は、ギリシア世界さらにはローマに広がり、各地の医療施設を伴う聖域で崇拝

されていたが、その中心はエピダウロスであった。アスクレピオスは英雄であり、最高の医師であり、神アポロンの息子であり、かつ死さえ無効にすることが出来る人間であった。その崇拝の主要な特徴は、神からの夢の受信による治療の処方であった。実際の医療治療は夢を伴って行われた。その夢についてはアエリウス・アリストティデスの『長い聖なる物語 (Hieroi Logoi)』や奇跡的な治療について刻印したエピダウロス他から出土した碑文 (M.Guardicci, *Epigrafia Graeca* 4, 1978, 143-66) 等に記録されている。

アスクレピオスの聖域アスクレピエイオンは聖なる病院や養育院に発達していくが、その広範な魅力により地方の知識人の集会場所や哲学的教育の場となった。また殆どのアスクレピエイオンは、町の外、海岸や人里離れた溪谷あるいは町の周辺地にあった。そして多くは神託の聖域と共有していた。すなわち両者とも人間が直接神と会える場所であった。

また図像学においては、アスクレピオスは一般的に熟年で、豊かな髪と濃い髭を生やし、ヒマティオンをまとい、胸ははだけた立像であるが、概して穏和で哀れみ深い表情である。彼の最も普遍的な属性は聖なる杖や再生の象徴である蛇、時として杖に巻き付く蛇であった。

またそこで治癒した人々がアスクレピオスに感謝して納めた奉納品も注目される。足や手、乳房、目、心臓、時には性器などをかたどった石製やテラコッタ製の小像やレリーフ等が残っているが、左手に小鳥を持つ目を患った子供の小像にみられる小鳥を持つというテーマはアスクレピオス崇拝を連想させるものである。

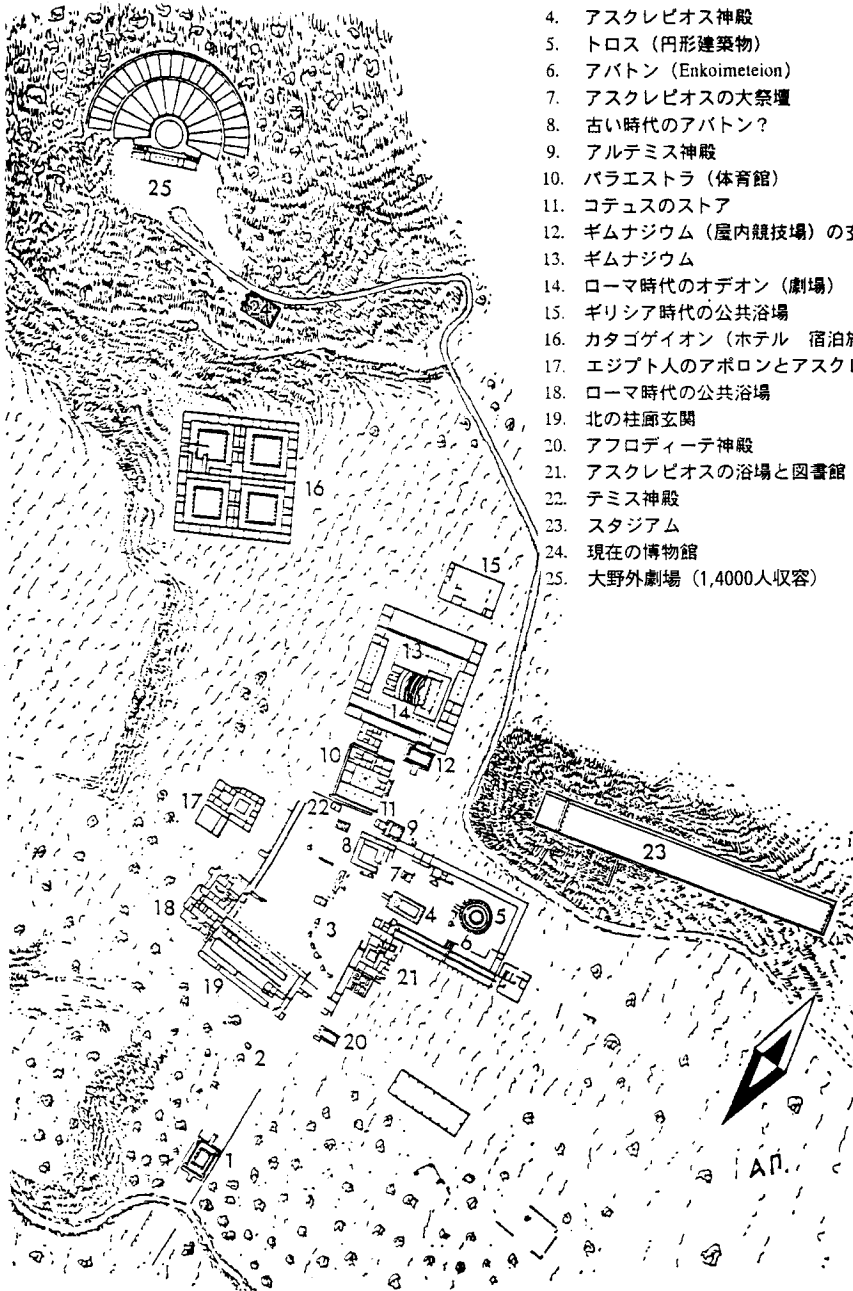
古代ギリシア人の聖地参詣として、国家規模で行われたデルフィーに代表される神託所への神託伺いとお礼の参詣、また各ポリスの中心にあるアクロポリスに祭られる守護神の神殿 (例えばアテナイでは守護神アテナ女神を祭るパルテノン神殿、そこで行われるパン・アテナイア祭にはギリシア各地から人々が集った) への参詣、また4年に1度オリンピアで行われたゼウス神へのスポーツ奉納 (オリンピック競技) 等があげられるが、エピダウロスをはじめギリシア各地で行われたエピダウロス崇拝は、病の治療とそれのお礼詣りという一般の人々の生活に密着した巡礼活動であった。前述のように病を持った人々がアスクレピオスの聖域を訪れた初夜アバトンに籠もり、夢見でアスクレピオスの診断告知を受け、翌朝それを受けて医師団が治療法を決めた。トロスを中心に治療が進められる一方、彼らはギムナジウムやパラエストラ、スタジアムでスポーツを、公衆浴場、図書館で余暇を、そして野外劇場で悲劇や喜劇などの演劇を楽しみ、いわばエピダウロス滞在中、心身のリフレッシュを図った。このようにエピダウロスをはじめとするアスクレピエイオンにおいては、物理的・外科的治療のみならず精神的解放も行い、恐らく来訪者にとっては滞在期間中、非日常的な経験を味わうことで心身の再生を行ったものと思われる。そして後日改めて治癒のお礼に奉納品を持って再び聖地を訪れたのであろう。

#### <参考文献>

- S. Hornblower & A. Spawforth eds., *THE OXFORD CLASSICAL DICTIONARY*, Oxford, 1996<sup>3</sup>, Asclepiusの項。  
高津春繁『ギリシア・ローマ神話辞典』岩波書店、1960年。  
O.Reverdin & B.Grange eds., *Le Sanctaire grec*, 1992。  
C.Voutsas, *EPIDAUROS AND MUSEUM*, Athens.

## アスクレピオスの聖域

1. 聖域の入口（プロピュライア）
2. 聖なる道
3. 聖なる広場
4. アスクレピオス神殿
5. トロス（円形建築物）
6. アバトン（Enkoimeteion）
7. アスクレピオスの大祭壇
8. 古い時代のアバトン？
9. アルテミス神殿
10. パラエストラ（体育館）
11. コテュスのストア
12. ギムナジウム（屋内競技場）の玄関
13. ギムナジウム
14. ローマ時代のオデオン（劇場）
15. ギリシア時代の公共浴場
16. カタゴゲイオン（ホテル 宿泊施設）
17. エジプト人のアポロンとアスクレピオスの神殿
18. ローマ時代の公共浴場
19. 北の柱廊玄関
20. アフロディーテ神殿
21. アスクレピオスの浴場と図書館
22. テミス神殿
23. スタジアム
24. 現在の博物館
25. 大野外劇場（1,400人収容）



出典：C.Voutsas, *EPIDAUROS AND MUSEUM*, p.16